

見られた時間と生きられた時間

菊 地 恵 善

1. 問題の所在

時間の存在の不思議さは、凡そ人間であれば誰でも一度は確かに感じる類の不思議さである。なぜなら、時間ほど身近であり、生活に不可欠な要素でありながら、時間とは何かと考え始めると、これほど捉えにくいものはないからである。時計を見て、学校や会社の始まる時刻を考慮して急いだり、あるいは、仕事の打合せや遊びの計画を念頭に行動を進めたりしながらも、私たちが時間について言えることは、せいぜい、人間が否応なく従わなければならない絶対的な条件だという位のことである。

しかし、少し反省してみれば分かるように、私たちが時間として認識し配慮しているものは、同じ時間という言葉で呼んではいても、時計やカレンダーや時刻表だったりして、実際には、時計の針の運動や数字の変化、時刻や月日を示す数字の一覧表に過ぎないことに気付く。私たちが時間として示すことができるのは、時計の針の動きであり、今現在の時刻であり、今日の日付けであり、厳密に言えば、「時間」そのものではないことは明らかである。誰かが時計を見ながら、つい先程の針の位置と今現在の針の位置との間にあったのが時間だと説明したとしても、この説明を聞く側からすれば、見えるのはいつでも今現在の針だけであるから、時間が一体何を示しているのか、皆目分からないというのが正直な反応であるだろう。針の位置の変化それ自体が時間なのか、それとも、針の位置の変化を変化として認識するためには、先程の針の位置の記憶が必要であろうから、そこには記憶が介在しているはずであり、だとすれば、針の位置の変化それ自体が時間なのではなく、変化を変化として認識する記憶の働きこそが時間なのではないか。こうして、時計を指さして時間を説明するやり方は、時間ということで一体何を考えればよいのかについて、たちまち窮地に立たされる。

私たちが指し示そうとしても、実際に指し示された時間は、絶えず運動し変化する「もの」でしかない。また、私たちが掴まえようとしても、掴まえられた時間は、既に過ぎ去ってしまった時間か、やがて来るであろう時間か、いずれにしても眺められた距離でしか

い。そして、この場合、さっきから今へと、また今から未来へと、その眺めやられた距離は、ものがあつた位置と現にある位置とやがてあるであろう位置によって測られるのであるから、この「もの」と「もの」の間として理解された時間もまた、「もの」に定位して摺まえられた時間とすることができる。

この見られた時間は、果たして私たちの生きている時間と同じ時間なのだろうか。「もの」の運動や変化をどれ程拡大しても、そこに見えてくるのは、依然として「もの」だけではないし、ものともとの「間」をいかに精密に測定しても、その「間」には何もない。

「もの」の運動が時間そのものではないし、ものともとの「間」も、時間として意識されるものではあつても、時間そのものではない。太陽や星、時計や原子など、基準となる運動体によって告知されているのは、各種の運動や変化を共通に比較計算するための基準でしかないし、ものともとの間として計算される量としての時間も、同じく各種の運動や変化を共通に比較計算するための尺度でしかない。

「もの」として見られ、「間」として計算される時間は、物体に即して見られた時間、あるいは、物体が拡がりを持つことを本質とするかぎり、空間から理解された時間とすることができる。しかし、こうした時間は、私たちが生活において基準として採用すべき条件ではあつても、私たちが現に生きている時間のすべてを尽くすものではない。

もし、この物体に即して見られ、物理的な量として計算される時間を基準にして、私たちの人生の全体を把握しようとすれば、私たちの人生は、誕生から死に至る、たかだか数十年の時「間」となり、人生を生きるとは、歩行や言語を学び、学習し労働し、最後の死に向かって歩いていく運動でしかないということになる。人間が「死すべきもの」であるということは、言い換えれば、人間は時間の中を生きなければならないということである。こうした時間概念から人生を見ると、人生ははかなく移ろい易いものであり、どんな喜びも幸福も過ぎ去らざるをえない限り、空しく哀しいものということになる。時間は否応なく人間を変化させ、若さや幸福を破壊していく無慈悲な力であり、桎梏に過ぎない。

こうした時間概念、そしてさらに、こうした時間概念から見られた人生観が、私たちの現に生きている時間のありさまのすべてを必ずしも尽くしているのではないとすれば、一度こうした時間理解から自由にならなければならない。そこで、これから、わたしたちが実際に生きている時間の諸相を順次見ていくことにしたい。

ただ一つここで注意しておくべきは、「見られた時間」が「もの」に即して理解された時間だからと言って、これから分析しようとする「生きられた時間」が、「もの」に対する「意識」や「心」の時間だというわけではないことである。なぜなら、「生きられた時間」をすぐさま「意識」や「心」の時間と名付けたとしても、それによって直ちに「もの」に即しての時間理解から自由になれるとは限らないからである。例えば、純粋な意識の時間的な構造を分析する研究においては、物体の運動や物理的刺激の変化の時間的な経過を予め前

提し、それを意識の側から再構成するといった結果に陥る危険が考えられる。また、時間の体験のされ方を心理学的に実験する研究においては、客観的な運動や変化を基準にして心理的な体験の傾向の法則性を測定するという方法をとるならば、体験の事実を確定することはできても、体験の意味は原理的に問えず、心の時間は明らかにできないことになるだろう。したがって、「生きられた時間」を捉えるには、それを直ちに意識の時間や心の時間と考えずに、実際の体験に即して、その意味を解釈していくことの方がより重要である。

2. 分析

この節では、私たちが現にそれを生きている時間を、いくつかの観点から考察し、時間の体験のされ方がどのように異なってくるか、そこに何らかの規則性があるのかどうかを見てみることにしよう。

(1) 出来事の量

まず、仕事や出来事がたくさん続いてある時と、それ程ない時とで、時間の進み方がどう違って感じられるか、時間と内容の関係を見てみよう。但し、繰り返しになるが、物理的には等量の時間が、心理状態によって違って感じられるという意味での、時間の進み方をここで問題にしようとしているのではない。もし、そのような心理学的な時間を考えるとすれば、私たちは、物理的な時間を基本としながら、それとは別にもう一つ、心理的な時間を付随的に考えるということになるからである。私たちによって現に生きられている時間とは、そういう意味での心理的な時間ではなく、それを通してのみ生きていることが実感される時間という意味での、唯一絶対の時間のことである。

同じ一日でも、いろいろたくさん仕事をした時や次々とさまざまな出来事が起きた時は、その日を非常に長い一日だったと感じる。反対に、さしたる変わった出来事もなく、普通と変わらぬ一日を過ごした時は、あっという間に一日が過ぎ去ったような気がする。だから、ひとまず内容の多かった時は、過ぎ去った時間は長く感じられ、その時間はゆっくりと経過したように感じられると言えそうである。

ところが、この規則性は、全く正反対の事実によって簡単に否定されてしまう。つまり、仕事や出来事がただ多いだけでは、その間の時間は長く充実した時間に感じられるとは限らず、反対に、この場合にこそあっという間に過ぎ去ったような感じがするのである。実際に、何人もの人と会って話をし、仕事をたくさん済ませて、店で買い物をして、急いで家事を済ませて休むに至る一日も、その間にした仕事や起きた出来事は多いにしても、その忙しい一日が毎日のこととなると、その一日は短く感じられるのが普通である。たくさん勉強しなければならない受験生や毎日仕事に追われるようにして働いているサラリーマンにとっての一日は、その忙しさが常態となれば、今日一日も前日と変わらないただの日に成り下がるのである。忙しさを常態とする人にとっては、忙しい毎日が短く感じられる

から、反対に、そうした忙しさから解放された一日は、反対に、非常に長く感じられることになる。

以上からすると、仕事や出来事の多寡が時間の進み方の緩急や、経過した時間の長短を単純に決定するとは言えないことになる。内容が多くても少なくても、それが常態となれば、あっと言う間に過ぎ去るのである。

(2) 関心の度合い

時間の内容となる仕事や出来事の多寡が、時間の流れ方の遅速や流れ去った時間の長短を決定するのでないとなれば、それらを決定するものとして次に考えられるのは、私たちがそのつど関わっている対象に対して持つ、私たちの興味や関心の度合いであろう。

すると、確かに、仕事であれ家事であれ遊びであれ、自分にとって興味のある事柄に携わっている時間は、速く過ぎ去るように感じ、その間の時間は非常に短かったように感じられる。これとは反対に、するのが億劫に思われることや嫌で嫌でたまらないようなことをしている時には、その時間は耐えがたい程ゆっくりとしか進まず、そのことが完了するまでにかかるであろう時間は気の遠くなるほど長く感じられる。

例えば、魚釣りである。釣針に餌を付けて水に垂らして、浮きが引くのを待つ時間と、実際に浮きが引いてから、魚を釣り上げる行動にかかる時間とを比べてみれば、前者の方が後者よりもはるかに長いであろう。しかし、魚釣りに興じている人にとっては、浮きが引くのを待つ間の時間も、単なる空虚な時間ではなくて、立派に魚釣りをしている時間であって、生身の魚を相手に奮闘している時間だけが魚釣りの時間なのではない。だから、いつ引くとも分からぬ浮きをただ見つめているとしか他人には見えない釣り人も、当の本人にとっては、浮きを見つめている時間は、たとえ3時間であろうと、半日であろうと、日の出から日没まで丸一日であろうと、それは極めて短い時間なのである。

ところが、魚釣りに全く興味のない人、あるいは、多少興味を持って魚釣りを始めた人にとっては、このただ浮きを見つめているだけの時間は、退屈以外の何ものでもない。今か今かと浮きの引くのを見つめているうちに、待つことに耐えられなくなる。釣りの好きな人には、浮きの引くのを待つ時間も釣りの内に含まれるのに対して、門外漢にとっては、それはただ浮きが引き、生身の魚と相手する本来の仕事に至る、単なる待ち時間でしかないのである。(では、魚釣りの退屈さに耐えられない素人に釣り好きになってもらうために、待ち時間の要らない釣り、例えば、空腹の魚をたくさん放した釣り堀で釣りをしてもらえば、釣り好きになってもらえるだろうか。期待に反して、それとは反対の結果が出ることは目に見えている。次から次へと魚が釣れば、魚釣りが楽しくなるかと言えば、今度は、魚を釣るのに忙しくて、とても釣りを楽しむ余裕などはなくなり、すぐに飽きてしまうであろう。)

対象への興味がかかった時間の長さの感じ方を左右する例としては、音楽を挙げること

もできるだろう。クラシック音楽に興味のない人にとっては、4楽章からなる交響曲に付き合うのは、退屈であるばかりか苦痛ですらある。ベートーヴェンの第9も、例の有名な終楽章の合唱が出てくるまでは、ひたすら忍耐あるのみということになる。ブルックナーの交響曲を聴かされるとなったら、おそらく逃げ出すであろう。ところが反対に、クラシック音楽ファンがハードロックを聴かされると、今度はそちらが騒音に耐えかねて逃げ出すであろう。

(3) 自分との関係

自分の興味のあることをしている時間は、短く感じられる。このことは、対象がおもしろいからであるが、それはまた、それをおもしろがっている自分を相手にしているからでもある。だから、自分の趣味に打ち興じている時とは反対に、他人の要求に従って行動しなければならぬ時や、他人に強制されて仕事をしなければならない時は、その時間は苦痛をもたらす、耐えがたく長く感じられる。

例えば、家の近くを散歩するのは、快適で、自由な開放感を味わわせてくれるものであるが、これが、他人に頼まれた用事で出かけなければならないとなると、非常な苦痛を感じる。しかも、急いであるようせかされると、その苦痛はさらに強くなる。また別の例を挙げれば、登山である。登山は登ることそれ自体が目的だから楽しいのであって、どんな険しい山岳でも人は喜んで登る。しかし、他人のために、仕方なく登らざるを得ないとなれば、近くの街中の坂を登るのでさえ、人は厭うものである。

ところで、自分から自発的に行うことと他人から強制されて行うこととの違いが、時間の流れ方の違いを生み出すとしても、他人からの強制によるからといって、必ずしも、その活動が苦痛であり、その活動の行われる時間が無限に長く感じられるというわけでもない。他人の要求に応ずるものであれ、他人の強制に従うものであれ、その活動が一定の意味を担っていれば、私たちはその活動を必ずしも苦痛に思わないし、その時間を長く感じもしない。例えば、山に登ることを強制されても、それが何の目的もなく、それが行われ続けることだけが目的であるような宗教儀式や年中行事でさえあれば、甘んじて山に登るであろう。

だから、私たち人間にとって重要なのは、自発的か強制的かの違いよりも、自分のすることに意味があるかどうかあり、意味のあることをしているという実感をもって時間を生きているかどうかということである。この点において、神話や宗教において、罪を犯した不遜な人間への刑罰として、無限に反復される無意味な仕事が考えられているのは、決して偶然ではない。箒で水を汲む仕事とか、積み上げられた途端に崩れさる石の山に石を運び上げる仕事、皮膚を刀で切り裂かれながらも、皮膚が再生すると再び刀で切り裂かれざるを得ない刑罰とか、こう言った無限に続く仕事や刑罰として考えられるのは、無意味な反復に過ぎない過程であり、その反復の無限の連続としての時間である。

仕事や出来事が生起しても、それが無意味に反復されるだけだと、それを行うのは苦痛となり、それが経過する時間は、無限に流れ行く時間として表象される。この場合、人間が時間を生きるのではなく、人間は時間の中を生きることを余儀なくされるのであり、こうした時間を生きる人間にとっては、時間とは刑罰の別名に他ならない。逆に言えば、このことは、私たち人間にとって、時間の中を生きるのではなく、時間を生きるということがどういうことであるかを暗示しているとも考えられる。それは何か。それは、何であれ、ある活動を一定の意味を持った行為として行うことである。ある活動を一定の意味を持った行為として遂行することのうちにのみ、あの生きられた時間はあるのだ。

(4) 精神の緊張度

自分の興味のあることを自らすすんで自発的にする時、時間はあっという間に過ぎ去るのに対して、自分の嫌いなことを他人に強制されてする時には、時間は遅々として進まない。これは誰もが経験している事実である。漫画を読んだりテレビを見たりしている時間は本当に速い。ところが、学校で嫌いな科目の授業を聴いたり、不得意な科目の試験を受けたりしなければならない時間は、死ぬ程退屈で長く感じられる。

では、楽しくて速く過ぎ去った時間は、その時に感じられた速さからして、それが過ぎ去った後でも、印象や記憶の点から言って内容が希薄になり、短い時間に感じられるようになるのだろうか。反対に、当のその時に死ぬ程退屈でゆっくりだった時間の方が、その時のゆるやかな流れ方に応じて、それが過ぎ去った後でも、印象や記憶が固く刻まれて、内容的にも豊かになり、長い時間だったように感じられるのだろうか。つまり、体験されている時に短く感じられた時間は、過去の体験となった時も短い時間に感じられ、体験されている時に長く感じられた時間は、過去の体験となった時も長い時間に感じられるのだろうか。答えは、誰でも知っているように、否である。

仕事や遊びに夢中になり、楽しくて矢のように過ぎ去った時間は、過去となった時には、短い時間と感じるどころか、内容が豊かな密度の高い充実した時間になっているのであり、その密度によって、実際に経過した物理的な量としての時間以上に長かったように思えてくる。これに反して、もどかしい程ゆっくりにしかなかった時間の方こそ、振り返って見られた時には、内容の貧弱な密度の低い時間となって、その密度の低さによって、圧縮されて短い時間だったように思われる。

楽しい時間は、その時は短く感じられ、過去のものとして振り返られた時には長く感じられる。反対に、苦痛で退屈な時間は、その時は長く感じられるが、過去のものとして振り返られた時には短く感じられる。短いものが長く、長いものが短いという、時間をめぐるとこの逆説的な事態は、時間の長さというものが、私たちにとっては、物理的な量としての長さのことではなく、精神の緊張度や体験の密度によって決まる、ある括がりのことだということを如実に物語っている。

このことを最もよく知らせてくれるのが、子ども時代を振り返った時に大人の洩らす嘆息である。子どもの時は毎日、時間の経つのも忘れて遊びに熱中して過ごし、時間は流れていくように感じていたのに、今から振り返ってみると、あの時程ゆっくり時間が過ぎ、内容の充実した長い時間はなかった。それに比べて、大人となってからの時間は、時間を年中気にしながら、時間を無駄にしないように仕事に家事に趣味に専念しているのに、時間はただ慌ただしく過ぎていくだけであって、過ぎ去った時間は、多くの仕事を忙しくしている割には何と短く感じるのか。子ども時代より長く大人の時代を生きているのに、記憶に残る、生きた実感のする時間の長さとしては、子ども時代の時間の方がはるかに長く感じるのは何故だろう。時間を忘れて遊ぶ子どもが長い時間を生き、絶えず時間を気にして生活している大人が短い時間をしか生きられないというのは、何という皮肉だろう。

.....

何事も新しい経験であり、興味深い出来事である子どもの世界においては、外を流れる時間とは別に、経験の行われる時間、出来事の生じる時間がそれとして体験される。ここでは、時間の長さとは、その経験がなされるのに費やされた時間であり、その出来事が生じるのにかかった時間である。これとは反対に、大人の生きている世界においては、経験であれ出来事であれ、外を流れる時間の中に組み入れられて、実行され展開される。ここでは、経験や出来事が時間の長さを決定するのではなく、外の時間によって経験や出来事が測られ調整される。そのため、精神の注意が向けられるのは、経験や出来事そのものではなく、外を流れる時間の長さ、端的には時計の針の動きとなる。

子どもと大人との時間体験の違いは、瑣末なことのようにでありながら、実は決定的な違いを意味している。例えば、10分間と予め時間を決められて休憩するのと、コーヒー一杯を飲む間休憩するのとでは、たとえその10分間にコーヒーが飲み終えることができたとしても、二つの事柄は私たちにとって決して同じことではない。10分後を待ちながら休憩するのは、私たちに休憩したという実感を与えてくれるだろうか。恐らく与えてくれないだろう。なぜなら、休憩するとは本来、今休憩することであり、10分後を目指して休憩することではないからである。

時計の針の動きに合わせて行動しなければならなくなると、私たちは、皮肉にも、その間の時間を本当に生きることができなくなるのではないだろうか。時計を見れば見るほど、生きているという実感を持って、時間を生きることができなくなるのではないだろうか。時間を節約して、時間を有効に使うとすればする程、私たちは外の時間に支配され、経験の歩みに合わせた時間を生きることができなくなるのではないだろうか。大人は子どもに言う、漫画を読んでいる位なら、その時間勉強しなさい、と。しかし、漫画を読む時間を節約して、その時間勉強するようになった時、その子どもは、時計の時間のために、漫画を読むことのうちで過ぎていく時間を捨てたことになる。漫画や小説を読む時間を無

駄だと思った瞬間から、その人はもう漫画や小説を読まなくなるだろう。

子ども時代に比べて、大人になると時間の進み方が速いと言われる。しかも、年齢を重ねれば重ねる程、加速度的に時間は速く進むと言われる。こうした実感も、以上述べてきたことからすれば、容易に理解される。今現在していることに常に新たに興味を感じるような出来事は、大人になればなるほど少なくなってくる。人生の経験も世の中の出来事も、常識によって理解し、習慣に従って処理するようになり、そうなればなる程、することなすこと、見ること聞くこと、すべてがさして代わり映えのない平凡な事実になってくる。習慣は精神の緊張度を軽減してくれるが、精神の関与しない出来事は、すべてが一様になっていくから、当然、時間も流れるように過ぎ去っていくことにならざるを得ない。

(5) 時間の拡がり

①行為と時間

私たちが生きている時間とは、時計によって測られた時間ではなく、私たちの経験の歩みを作り出すある拡がりである。時計の針の動きを見ても、私たちに確かめることができるのは針の位置だけであって、時間の拡がりではない。確かに、運動なしには時間はないと言えるが、その運動とはしかし、見られた運動でなくて、真実には、私たちが自ら行うところの運動でなければならない。

私たちは何事かをなすことのうちで時間の拡がりを生きることができる。したがって、もし私たちが自ら何もしないとすれば、時間は事柄の前後の関係ではあっても、そこに拡がりや厚みを感じることはできないだろう。もし私たちが無為の生活を受動的に過ごすだけであるとすれば、そこには状態だけがあって活動はなく、時間は流れず、永遠の現在が続くことになるだろう。ところが、私たちの生きている今とは、永遠の現在でもなければ、前後の関係の中へ位置付けられる現在でもなく、何かをすることの中で見渡される拡がりである。

しかし勿論、何事かを自ら進んですること、即ち行為のすべてが、こうした今という時間の拡がりを実感させてくれるものでもないことも、私たちのよく知っていることである。例えば、今現在している勉強や仕事の意味はきわめて明白であるのに、それが余りに部分的過ぎて、行為としての統一を感じられないような時、私たちは、そこに自分の時間を見出すことができない。また、指定された時期までに仕上げるよう要求されて仕事をするような場合も、未来に先回りし過ぎた結果、今現在していることの内生きられるべき時間が奪われる。

この点からすれば、蟻ときりぎりすの寓話から、勤勉の勧めという一般的な教訓とは別に、全く正反対の内容の教訓を引き出すことができる。つまり、冬に備えて勤勉に働く蟻は、今を生きていない。未来によく生きるために現在を犠牲にして生きるのは、今現在よく生きることを自ら放棄するものである。これに引き換え、今を生きているきりぎりすこ

そ、未来のために現在を犠牲にしないのであるから、正に生きていると言えるのではないか。なぜなら、生きるとは、今を生きること以外の何物でもないからである。私たちは、普段の生活においては、これら二つの生き方を共に生きているから、これら両者を全く別の生き方として対比させるのは、極端な想像ではある。しかし、未来への深謀遠慮が人間の生を萎縮させ疲弊させてしまうことは、過去の過剰な記憶が人間の生を強張らせ脆弱にするのと同じである。

②行為の拡がりと重層性

私たち人間にとって、生きるとは今を生きることであり、今を生きるとは、今何事かをしている自分として生きることである。

しかし、生きることの実感は自分が今なしつつあることの内にしかないとは言っても、この何事かをなしつつある今に生きるということは、それ程簡単なことではない。一つの理由は、私たちは自分のすることを時計によって指示された時間に合わせてしなければならないという社会的制約を負っていることである。学校で体育が好きだからといっていつまでも校庭にいるわけにはいかないし、会社の仕事であれば、決められた時間内に決められた仕事を済まさなければならない。そして、もう一つの理由として考えられるのは、今自分がしている行為は決して自分の理解する特定の意味だけではなく、常に多くの意味の解釈を許容する拡がりや重層性を持つということである。それはこうである。

今あなたは何をしていますのですか。今、私は英語の勉強をしている。しかし、英語の勉強をしているという行為の意味は、それをしている当の私によって生きられている行為としてはさまざまである。明日の授業の予習をしているのか、受験勉強としてしているのか、英語を習得して外国に行くことを目指してしているのか、それとも学校を卒業する単位を得るために止むを得ずしているのか、人によってさまざまであるし、同じ人においても同時に重なりあっている。すると、今自分のしていることは明確に理解しているにもかかわらず(理解していなければ行為ではないが)、自分のしていることの中に自分の存在を実感できないということが生じ得ることになる。今勉強しておかないと後で困るから、とか、いずれ何かの役に立つから、とかの理由で、今勉強しなければならないとしたら、今勉強することは漠然とした未来によって、その行為としての意味を奪われてしまう。

今自分のしていることの中に自分の存在を実感することは、したがって、行為の意味の拡がりや重層性を決然として拒否することなしにはありえない。お前は騙されているのだ、とか、お前のやっていることは絶望的な位に無意味だ、とか他人に言われても、愚直に耳を閉ざすことなしには、私は私の今を生きられない。街頭で戦争反対の署名を呼びかけることも、道端に捨てられた空き缶を拾い集めることも、英雄的な信念を持ってでなければできないことである。あるいは、行為の意味の訴えが絶望的に期待できない時には、その絶望に徹するだけのニヒリストでなければならない。英雄とは、超人的な楽道家か、そう

でなければ非人間的なニヒリストである。

ここからすれば、今していることの内に自分が生きている実感を掴もうとすれば、それは、非常に逆説的に響くが、無意味なことを取えてすることが最も効果的な方法であり、唯一残された方法であるかも知れない。ノウハウ的な知識が氾濫し、どんなことをするにも、その方法が予めお膳立され、その結果まで見通されてしまうような、すべて計算され尽くした現代社会では、今自分がしていることの内に自分の存在を実感することは非常に困難になっている。暴力に精神の自由を求め、非行に自分の存在の確認を求める青年は、現代人の生の陰画である。山岳で修行する宗教家や極地の探検に挑む冒険家は、現代人の眼からすれば、まだ恵まれていた時代の人間である。そこではまだ、生きていることを実感する可能性が残されていた。これに対して現代人はどうか。山岳にも極地にも身を隠す場所はないし、何か新しいことを真剣にするにしても、それは所詮大衆の受けを狙った滑稽な冗談でしかない。平凡な日常生活の中で、当たり前の事実やありふれた出来事の中に喜びを発見しようとしても、その成果はいち早く分析や評価的にされてしまうし、喜びに自足した世界は、さらに刺激的な快楽を推奨する他人によってたわいもなく踏み荒らされてしまう。

現代社会の中で救いを求めることは絶望的に困難である。修行や冒険は今時はやらないし、救いを求める声真剣であればある程、それを聞く人は悪巫山戯としか受け取らない。自分が生きているという実感、何かをなしつつあることの内でも今現在の自分の存在を感じることに、こうした現実性が奪われても、何故多くの現代人は今なお狂気に陥らないでいられるのか。それは、そうしたこと自体をも忘却しているからではないだろうか。

③生きられた時間から流れる時間へ

時計によって見られた時間と行為の内でも過ぎていく生きられた時間との対比は、しかし、両者が画然と区別されて別々に存在することを意味するものではない。私たちは通常、時計によって測られる時間を見やりながら何らかの行為をしているし、さらには、時計によって見越された時点を目指して一定の結果をもたらそうとして当の行為を進めることの内にも、行為を遂行していることを実感し、充実した時間と自分の存在を確認することもある。ただ気儘に漫然と何かをするのではなく、一定の時間の制約の内でもなければならぬとされてこそ、それをするに行為を遂行する満足感と自分の時間の充足感を得られることは、誰もが知っていることである。例えば、提出期限のある仕事は、確かに、時間的な条件を制約として持っている。がしかし、その時間的な制限があることによって、私たちは自分の仕事にある完結した形を与えられるのである。時計の時間を見やることは、こうした場合、見られた時間の中に行為が組み込まれるのではなく、反対に、行為が行為として完結した形をとることに大きく寄与するのである。

見られた時間と生きられた時間は、初めから別種の時間として相互に独立して存在する

のではないし、後者がより本質的な時間、前者はその派生態として予め価値的に区別されるものでもない。ただ、私たちが時間の存在を感じるのは私たちが今何かをしつつあることの内にしかないということ、見られた時間は時間の位置は示しても、あの時間の厚みは示してはいないということ、今やこれだけは疑いえない事実として確認できる。

では、見られた時間が、よく見れば、常に立ち止まる今でしかないのに、そこにどうして私たちは、次々と過ぎ去る今を想定し、よく知られた「流れる時間」というイメージを容易に作り上げるのだろうか。それは恐らく、今何かをしている自分から、その行為が既に成されたこととして析出された時、その何かをしていた時の今(今₀)から自分の行為が分離され、その今が他の今と無差別的な今(今₁ 今₂ 今₃ ……)として平均化され、前後の位置関係によってのみ特定されるような今となり、やがて時間そのものが、そうした前後関係の中に位置付けられる今の系列として考えられてくるのであろう。何かをしている今に、私たちは自分の存在と世界の存在の接点を持っているのであり、この現実への投錨点である特権的な今からこそ、あの流れる時間というイメージは生まれ育ってくるのだ。「流れる時間」は、私たちが生きている時間からすれば、そこから派生した時間形態だとは言えるだろうが、だからと言って、不純なものだと言うことはできない。

3. 時間に対するさまざまな心理的な感覚

この節では、前節の考察を踏まえて、私たちが時間について語る、いろいろな精神的な態度の本質を分析し、時間と精神の関係について解釈を進めることにしよう。

私たちは今していること、今なしつつあることの中で時間の厚みを生きている。したがって、今自分のしていることが自ら進んでしている行為として成り立たない時、私たちは時間の拡がりを生きることができなくなる。過去は記憶によって保存されているのではなく、思い出すことによって蘇るのであるし、未来は期待によって漠然と想像されるのではなく、ある結果を行為の目的として志向する意志によって掴まえられるのである。過去と未来の間に現在という瞬間があるのではなく、ある行為をなしつつある今が過去と未来の拡がりを開くのである。私たちが時間の存在について感じるさまざまな心理的な感覚は、今現在の私の精神が時間のどの方向を目指しているかの違いによって生じてくる。こうした感覚は、もし時間というものが未来から過去に向かっての今という瞬間の無限の流れだとしたら、到底成り立ち得ないものである。以下、さまざまな時間的な感覚について見てみることにしよう。

(1) 未来への関係から生じる心理的な感覚

a. 焦り

焦りとは、未来へと先を見通す精神が、その未来へと先回りし過ぎて、今現在の自分に安住できなくなった状態である。今していることの中で未来が先取りされる時には、私た

ちは、今自分のしていることに冷静に立ち向かうことができるが、先取りされた未来が今現在に差し迫って来る威力となった時には、精神は麻痺してしまうのである。私たちはその時、未来によって追い立てられ、今に留まることができなくなる。

b. 退屈

焦りが、未来に先回りし過ぎて今に留まることができない精神だとすれば、今現在自分のしていることをそれへと差し向けるべき未来への方向が欠けていて今に留まることができない精神が退屈である。あるいは、結局同じことであるが、はっきりと見通された未来と今現在していることとの関係が見えずに、今していることに安住できない時に、精神が置かれる心理状態が退屈である。

例えば、学校の授業に出ている時、授業の内容が難しく理解する努力が空しく思われる時、その授業を聴くことは耐えがたい退屈となる。内容の意味がわからないと、それを聴いて理解するという行為も方向を失い、行為を遂行する意欲を殺がれ、結局、それをしている自分に安心することができなくなる。今している行為を行為として遂行することが阻害されるような場合に、私たちは退屈を感じるのであるから、行為の遂行を阻害するような性格をもつものは、退屈なものと呼ばれることになる。ありきたりの内容の小説、有名過ぎて陳腐になってしまった音楽、くどいけれども内容のない話、これらはすべて退屈である。

退屈は確かに空しい時間である。しかし、退屈が今なすべきことが何もない状態であり、また、今していることに自分がしているという実感が伴わない状態であることからすれば、そこでは、自分の存在が否定的な形で告知されているとも考えることもできる。ただ何もしていないという状態が退屈なのではない。実際、休息している時には、何もしていないことに退屈を感じない。何かをしたいという行為への意欲があるにもかかわらず、何か特定の行為を選ぶことができないという、この落差こそが退屈なのである。したがって、退屈の裏には行為への意欲、自分であることへの意欲が隠されている。

(2) 現在へからの関係から生じる心理的な感覚

c. 多忙

行為における未来の契機が強過ぎても弱過ぎても、私たちが行為をしている今に留まり得なくなるのと同様に、私たちが今していることに注意を集中しているからといって、時間の生き生きした流れを感じるとは限らない。今現在への注意の集中が、逆に、今している行為によって開かれる時間の拡がりを成り立たせなくなること、こうした例として挙げられるのが、多忙であり、夢中である。

多忙とは何か。多忙とは、なすべきことが多くて、一つ一つの行為を達成したという完結性が奪われて、多くの事をしているにもかかわらず、自分がそれをしたという実感が希薄になっていくことである。多忙な時には、一つ一つの事柄は成し遂げられるのではなく、

片付けられ処理されるのである。ただ片付けられ処理されるに過ぎない仕事の内に、私たちは自分を見出すことはできない。忙しければ忙しい程、人は自分を見失っていくのである。

d. 夢中

多忙が自分を見失わせるのだとすれば、今現在自分がしていることに夢中になることは、夢中になっている自分を忘れさせる。時の経つのも忘れと言われるように、事柄に夢中になっている時、私たちは自分の存在を忘れる。

何かに夢中になるのをあれ程人が好むのは、そこで私たちは自分の存在を忘れられるからであり、時間の制約の中で常に何事かをするよう求められている窮屈さから自分を解放することができるからである。そしてまた、何かに夢中になっている人間が子どものようだと言われるのは、子どもが見られた時間の方から行為を行うのではなく、ひたすら行為そのものに没頭できるからである。これに対して、行為の後先を考え、行為の意味を推し測る大人は、行為に没頭することができなくなる。遊びにさえ夢中になれなくなる。

そこで、夢中になることは、一方では、時間や約束に束縛された自分からの解放としては願望の対象となり、他方では、現実から逃避して自分を忘れることとしては非難の対象となる。古来、今現在に円満具足した無我の境地が、遊びに熱中する子どもの姿に求められてきたのは、未来を思い煩い、現在に追われる大人の時間からすれば、子どもの生きている時間こそ理想と考えられるからであろう。しかし、子どもの無我の境地は、我を忘れて今を享受する幸福の理想ではあっても、自ら何かを創造する精神の理想ではない。自由な遊びも、何も生み出さないことが苦痛に変わる時がやって来る。単なる享受ではなく、自ら創造することを求める時、私たちは遊びの夢から目覚めるのである。

(3) 過去への関係から生じる心理的な感覚

e. 追憶

未来への先走りや現在への熱中が共に、私たちか今を生きることを歪めるのと同様に、過去への注意が今を生きることを妨げることもある。それは例えば、追憶であり、後悔である。

追憶とは、精神が過ぎ去った過去に注意を向けることであり、そのため現在が見えなくなることである。追憶に耽る精神にとって、あるものとして意識されるのは過ぎ去った過去なのであるから、現に今ある現在はあるものとしては意識されなくなる。突然肉親を失った家族は、その事実を受け入れられない限り、失われた過去の方が依然として現実であり続け、その事実によって現れた新しい現実も、現実として存在しないのである。人間は二つの現実を生きることはできない。過去の現実を生きる人間は、たとえ現在生きてはいても、常に、現在に背を向け過去を生きている。

だとすれば、過去というものは、過ぎ去った現実がひとりてに過去になるのではない。

過去を過ぎ去った現実として、現在の現実から切り離す精神によって初めて、過ぎ去った現実が過去になるのである。

f. 後悔

追憶が過去に生きる精神だとすれば、現在に生きていながら、過去の影に脅える精神が後悔である。失敗や欺瞞、事故や災害など、それ以前の現実を取り返すことが不可能になった時、今からやり直そうとしても、過去に向かって新たな行為を意欲することができないことを知った時、私たちは今現在何かを意欲する気力を失う。

新たに何かを意欲することができるのが自由であるとすれば、意欲しようとしても最早意欲できないのは自由の否定であり、過去こそは自由を求める精神にとって重荷であり、足枷であり、束縛である。未来への憂慮が今を生きる気力を奪うように、後悔となって影を落とす過去も、今を生きる気力を萎縮させる。

生きることは、私たちにとって時間を生きることに他ならない。だとすれば、生き生きと生きることは、生き生きした時間を生きることに他ならない。では、生き生きした時間とは、一体どのような時間だろうか。

4. 生きることと時間との関係

最後に、生きられた時間についての以上のような具体的な考察から、生きることと時間との関係についての若干の結論と、併せてまた、時間についての哲学的な探究の見通しを述べることにしたい。

(1) 時間はどこで生起するか

前節で見たような多様な時間体験は、単に多様なのではなく、ある共通した、根本的な時間の上に成り立つ体験と考えられる。未来を思い、過去を振り返り、現在の仕事に取り組む私たち人間の精神は、どこからその本来的な時間の観念を汲み取るのだろうか。

時間を瞬間的な今に還元すると、運動や変化が消え去り、時間が成り立たなくなること、これはエレア派のゼノンの指摘したことである。このゼノンのパラドックスに対しては、古来さまざまな解釈がなされてきた。一つの解釈はこうである。運動や変化は、一定の時間の経過を俟って初めて語り得るのであるから、時間を瞬間的な今に還元すると、運動や変化が消え去るのは当然である。従って、ゼノンの主張は、一般に受け取られているように、運動の否定を意味するものではなく、その実は、運動と静止の区別ができなくなることを意味するものに過ぎない。

この解釈は、ゼノンの主張の過激さを和らげる解釈である。しかし、運動や静止を語るためには、そのとき既に一定の時間が経過していることが前提条件になるのだとすれば、その時間の経過を私たちは一体どこから知るのだろうか。一方で、運動の存在は時間を前提にして初めて認められるものであるとし、他方で、その時間は何らかの運動なしには認

められないものであるとするならば、議論は堂々巡りになってしまう。

では、時間は私たち人間の意識に求められるだろうか。見られた世界が絶えず今現在の世界の姿しか示していないとすると、時間が成立する根拠は、過去の世界の姿を記憶し、未来の世界の姿を予想する人間の意識の能力に求められることになる。例えば、今朝起きた地震は、そのまま正午現在には既に過去の出来事となっており、正午現在は地震が起きているわけでもないし、今朝の地震が何らかの痕跡となって正午現在の世界に残っているのでもない。今朝起きた地震は、それを体験した私の記憶によって過去の出来事として保存されているのだ、というわけである。同様に、未来の出来事、例えば、私が夜テレビでサッカーの試合を観戦するというのも、正午現在に何らかの形で現れているわけではないから、それを希望している私の意識の期待する能力によって先取りされているのだ、というわけである。

しかし、過去を記憶したり、未来を期待したりする意識の能力は、本当に時間というものを成り立たせることができるのだろうか。それを疑う理由は、こうである。今朝の起きた地震と今夜観戦するであろうサッカーの試合とは、別々の事柄である以上、それら両者を時間的な前後関係に関係付ける能力は意識にはない。また、時間が単に前後の位置関係だとしたら、それら両者の「間」にある時間は、これこそ時間と呼ばれるべきものであるはずなのに、二つの事柄によっては決して説明できないし、それぞれ別種の能力によって保持する意識の力によっても決して構成することはできないと考えられるからである。

時間は、時間を生きる、つまり「間」を生きることでできる者にとってのみ、時間として現れてくるのではないだろうか。そして、その「間」とは、私たちが何かをしている、あるいは、何かをしつつある、その「間」のことではないだろうか。

(2) 行為の時間的構造

時間は、時間を生きる者にとってのみ、時間として存在するのではないか。そして、時間を生きるとは、ある行為をする、あるいはしつつあることなのではないか。

こうした解釈が、時間に関する哲学的な考察としてどれほどの意義があるか、これはさらなる哲学的な時間論の研究を俟って判断されなければならない。また、こうした解釈は、いまだ考察の端緒でしかないから、ただの事実の確認でしかないようにも思われるかもしれない。しかし、何かをなしつつあることのうちで初めて私たちは、あの方向性と厚みを持った時間の観念を持ち得るのだ、これは果たして単なる事実、当たり前過ぎる程自明な単なる事実だと言えようだろうか。

私たちは、あの時計によっていつも表示されている時間、刻々と過ぎ行く見られた時間の中で、あれをし、これをしながら生きているように思っている。しかし、既に述べたように、見られた時間には、私たちが時間の観念の本質的な内容と考える、あの方向性も厚みもない。むしろ、方向性や厚みを実感するのは、時間の中で行われると普通考える何ら

かの行為そのものにおいてなのではないだろうか。行為は、どんな行為も、それが行為と呼ばれる限り、始まりを持ち、それが遂行される途中を持ち、終わりを持つ。始まりと途中と終わりを持つ一連の行動、すなわち行為を行い得る者のみが、時間の観念を持つことができるのではないだろうか。

例えば、歯を磨くという行為である。これから歯を磨こうとすることが、未来を自分に引き寄せ、現に歯を磨いている今が、現在の自分を自分に告げ知らせ、歯を磨き終えることが、歯を磨いていた自分を過去の自分として現在から切り離すのである。別の例について見ても、事情は同じである。

意識から時間を構成する哲学的な試みは、意識に与えられる与件の例としてよくメロディーを取り上げる。しかし、一定のメロディーが時間的な構成物として聞こえてくるのは、意識の自然的な作用によるのではなく、そのメロディーを聴こうとする精神の働き、音楽を聴くという行為への意志があればこそ成り立つことである。注意が散漫な状態や興味のない音楽の場合、実際、音が聞こえてくることはあっても、音楽という音のつながりは聞こえてはこない。音楽を聴くにも、私たちは音楽を聴こうとする意志的な態度をとるのだからなければならない。

(3) 意志と行為

時間という観念が私たちが自ら行為することなしには持ちえない観念だとすれば、行為への意志を欠いた時、私たちからは時間の観念が消失するだろう。

見られた時間、測られた時間の束縛から精神の自由を回復しようとする時、私たちがすることは、見られた時間、測られた時間を忘れ、行為の中で過ぎ行く時間に身を任せられるような、そうした種類の行為に取りかかることである。例えば、本を読むこと、スポーツをすること、旅行をすることなどである。

生きることは測られた時間の中を生きることでなく、行為の中で繰り広げられる時間を生きることである。そして、ある何らかの行為をするということは、その意味を理解するだけでなく、自らそれを意欲することが必要である。では、どうして私たちはある行為をすることを欲するのだろうか。行為を意志すること、それ自体はさらに何ものかによって理由付けられているのだろうか。

私たち人間は、それと気付いた時には既にこの世に存在してしまっており、生きることは、それを望むべくさらに理由付けられるべきものではないとすれば、生きること自体を意欲することは、飢餓や戦争などの、生か死かを争うような特殊な事情の下ならともかく、日常の場面においてはあり得ないことである。人間は誰でも例外なく死ぬのだという事実は、確かに、生きることそれ自体を意欲するに足る十分な理由ではあろう。しかし、生きること自体を意欲するということと、今この時に、ある特定の行為を意欲するということとは、直ちに繋がらないのではないだろうか。

私たちが何かをする時、私たちはそれをするを意欲しているのであって、生きること全体を意欲しているのではない。私たちにとって、行為とは行為を意欲することである。では、その意欲はどこから生まれるのだろうか。それは、その行為が意欲するに値する行為であることによってである。

(4) 行為と価値

私たちは確かに、生きようとして普通生きているのであるが、しかし、殊更に生きることそれ自体を取って意欲しながら生きている訳ではない。生きるためには食事をしなければならず、食費を稼ぐためには働かなければならないが、私たちは、今この時、自分が生きるために食事をし、自分が生きるために何らかの仕事に励む訳ではない。生きること自体が生活の絶対的な目的となっているような状況は別として、普通一般には、生きること自体は行為の直接的な目的ではなく、あれこれの行為においては、それ自体に目的や意図があるのが普通である。私がバスに乗って職場に通うのは、生きるためだ、と真剣に言ったら、誰しもその生真面目さに当惑するであろうし、私がテレビを見ているのは、やはり同じく生きるためだ、と答えたら、奇妙な冗談として精神の異常を疑われかねないであろう。

こうして、生きること自体が意志的な行為の目的となる例外的な場合を別にすれば、生きることと、私たちがあれこれの行為をすることとの間には、非常な懸隔があることが認められる。そして実際、私たちが今この時このことをしようとする時（バスに乗って職場に向かうことやテレビを見ること）、その行為をしようとする意志を、生きようと意志すること一般によって説明することは困難である。

では、私たちが今自分がしていることを、敢えてするに値するもの、することを望むに足るものとするのは、一体どういう理由であろうか。それは、それをなすことに何らかの価値を認めるからであろう。これ以外の理由は考えられない。私たちは、自分が全く価値を認めないことを敢えてしようとする意志することができるだろうか。他人の意志の命令に従って、自分自身の意志に反して何かを行う場合は、勿論、その行為は私の行為とは認められないから例外として、自分のしようとすることで自分がそこに価値を認めないということはあることである。

私たちが生きるとは、ただ石のように存在するのでもなく、動物のように本能に従って行動するのでもなく、あれこれのことを行ないつつ生きることであり、それらの行為はそれをしようとする意志なしには成り立たない。そして、その行為への意志を成り立たせているのは、その行為が持つ価値である。

ところで、ある行為を価値あるものにする価値には、手段的な価値と、目的的な価値とがある。前者は例えば、学校に行って英語の勉強をすることである。大多数の学生にとって英語の勉強は、英語を学ぶことそれ自体の内に価値があるものとしてではなく、高校や

大学に進学したり、会社に就職したりするための手段として認められる価値しか持たない。これに対して後者は、例えば、音楽を聴いたり、スポーツをしたりすることである。音楽を聴いて精神的にリラックスすることがあったとしても、普通は、それを目指して音楽を聴くのではなく、音楽そのもののために音楽を聴くのである。スポーツに関しても同様である。

私たちはあれこれのことをしながら生きているが、それらあれこれのことが果たしてするに値するものなのかどうかを突き詰めると、その多くから行為への意志を支えている価値が脱落していけよう。特に手段的な価値しか認めていない行為に関しては、火を見るより明らかである。先の例で言えば、英語の勉強を大学の進学に、大学の進学を会社の就職にと、それが手段である目的を先へ先へと辿れば辿る程、今現在している英語の勉強からは行為としての価値が奪われていくであろう。では、これとは反対に、目的としてそれ自体に価値が認められる行為は、いつでも意志されるに値するだろうか。残念ながら、事実は必ずしもそうではない。スポーツでも趣味でも、能力の向上を目指すものであれ、所有物の量や質を競うものであれ、私にとって目的である価値も、他人や他のものとの比較によって、常にその価値を奪われかねない、相対的な価値しか持たないものである。

あらゆる行為からその見かけの価値を篩い落としていけば、それをするのをどうしても望まざるにはいられないような行為がなくなっていくであろう。将来を見越して言い逃れするのではなく、また他人の常識の影に逃げ隠れするのでもなく、今現在自分がしていることには、それをするに足る十分な理由があるのか、こう自問してみた者は必ずいるはずである。その時、彼の誠実な心胸はその問いの恐ろしさに震え上がり、温かい血が凍えていくのを感じはしなかっただろうか。

今現在していることを、そのままで肯定できる者は、その行為に乗り越えがたい、他のものには代えがたい価値を見出した者である。彼は言うであろう。これはこれでよいのだ、私は他であることを望まない、私は他ならぬこれを望むのだ、と。数学の勉強、山岳の縦走、スポーツの練習、ピアノ曲の一節、遠く水平線の彼方に沈む夕日、夕餉の一時などなど。それをしている正にその時に、その価値を肯定したくなるような瞬間というものは、確かに存在する。しかし、それに気付く者は僅かである。ましてや、その瞬間を生全体の重さに匹敵する重さにおいて自覚する者は、さらに僅かである。

(5) 価値と恩寵

昔から哲学者や宗教家は、死から生の価値を導き出そうとしてきた。しかも、その場合、死から生に与えられる価値は、無に比べればどんな存在でも無いよりはましだという消極的な価値でしかなかった。

しかし、死は果たして生に価値を与える根拠となり得るだろうか。もし、死が生に価値を与えることがあるとすれば、考えられるのは他者の死の場合である。例えば、私たちは

夭折した芸術家の生涯を憐れみ、短命であったことを思い、残された作品の完成度と芸術作品としての価値を高く評価する。でも、芸術家の死が芸術作品に価値を与えている訳ではあるまい。

では、私自身についてはどうか。この場合もやはり、私は私自身の生の価値をいまだ現実化されていない自分自身の死から導き出すことはできない。確かに、自分が死ぬかも知れないという、死の意識が私の生き方を変えることはあるかも知れない。しかし、その場合でも、私の死が私の生に特別な価値を与えるのではない。

次に、仮に死が生に、ある全体としての価値を与えたとしよう。しかし今度は、では、ある全体としての生そのものの価値が、今現在私がしようとしていることに価値を与えるかと言うと、それは無理なことである。既に述べたように、私たちが生きていくと言うのは、死なないために生きようとして辛うじて生きていくことを言うのではないし、また、生きることがどういう内容の行為に価値を与えるか、それを私たちは予め見通すこともできない。さらにまた、生きることが個々の行為に手段としての価値を与えるのだとして、未来を見越して、未来の方から現在を照らしたとしても、それは、現在の行為に価値を与えるどころか、むしろ多くの場合、価値を奪い去るものでしかないのである。

では、生きていくこと、今現在自分のしていることに、それを意欲するだけの価値を与えるもの、それは一体どこからやってくるのか。それは、私たちの意のままにならないこと、全くの偶然事であり、稀なる僥幸か、神意に帰すべき恩寵である。音楽を聴くこと、山に登ること、絵を集めること、仕事をする事、それらを価値あるものとして見出すのは確かに個々の私たちではある。しかし、それらのどれかに価値を見出したのは、私たち自身の意志ではない。価値の出現が全くの偶然事であればこそ、それを見出した者は我身の幸運に気付かないし、それをついに見出し得ない者は、我身の不運の原因を知ることができない。

今現在を肯定する者は、生の全体をも肯定したことになるのだとしても、その今現在を肯定できるかどうかは、価値の出現という偶然に俟つものだとすれば、その肯定は、意志の働きによるとは言えないのではないだろうか。偶然的な事柄を意志的な努力によってどうこうしようとする事は、原理的に不可能なことである。

生の肯定を意志的な努力によって図ろうとするニーチェの哲学は、ある肝心な点において論理的な飛躍を含んでいるのではないだろうか。発見という形であれ、創作という形であれ、ある新たな価値を創造するような行為は、確かに、意欲するに値する行為である。しかし、その価値は、果たして意志が産出するのであろうか。